



会誌編集委員会女子部 座談会

～私たち、いったん解散します!～

司会：加藤由花（東京女子大学） **記録・執筆：**坊農真弓（国立情報学研究所）

参加：五十嵐悠紀（明治大学），上松恵理子（武蔵野学院大学），菅谷みどり（芝浦工業大学），高岡詠子（上智大学），辻田 眸（(株) シンクフェーズ）（50音順）

塚本会誌編集長就任以来4年，編集長の一声で始まった会誌編集委員会女子部がいったん終了することになりました。これまで「女子部コラム」，「女子部が行く」を執筆してきた女子部の面々が，女子部への思いやこれからの学会における女性の在り方について井戸端会議形式で語り合いました。ここではその一部を皆さんと共有したいと思います。

女子部結成の経緯とモニタコメント

加藤（司会）：みなさん，お集まりいただきありがとうございます。これまで4年間続けてきた女子部ですが，ここでいったんおしまいにして，仕切り直しをしようという話になっています。どんな話でもいいのですが，まずきっかけから思い出しましょうか。最初は塚本編集長から，「女子がいっぱいいるからなんかコラムやりましょう」という話だったんですよね。学会としても女性会員を増

やしたいという話がちょうど出てきていて，それに乗ったという流れがあります。

坊農：当初は「塚本チルドレン（委員会に属さず，塚本編集長が集めたメンバの呼び方）」的な感じで集められたことや，塚本編集長が「女性」「女子」と強調しても全然嫌味がない雰囲気だったのでこれまで続けてきたのではないかと思います。塚本編集長の周りに集ったというか，あれを誰でもできるかと思ったらそうではないと思うので，塚本編集長の手腕によるところが大きいのではないかと思いますね。

加藤：そうそう，そうよね。

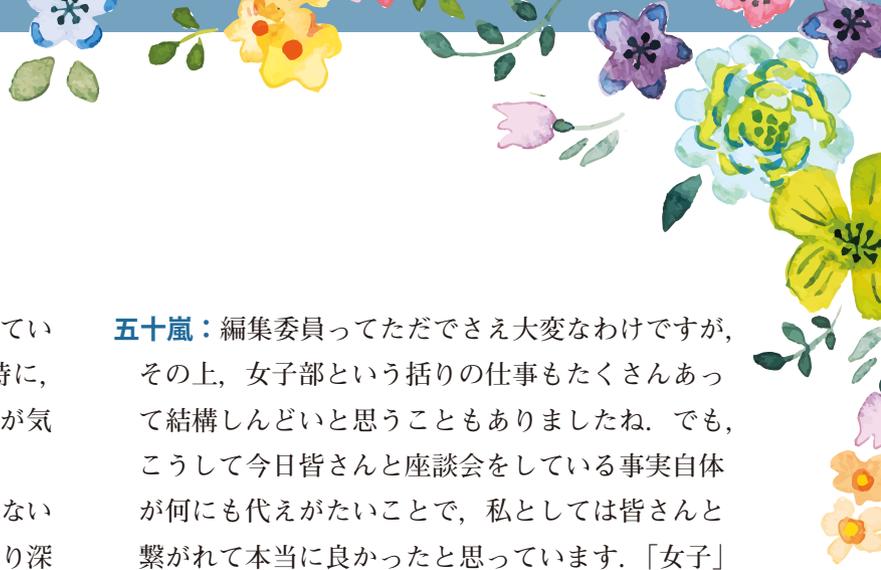
坊農：なので，4月から稲見編集長に変わるタイミングで，いったん女子部もやめるのがいいのかなと思って，今回の終了を提案しました。私たち，編集委員会でモニタコメントをしっかり見て議論する時間があるじゃないですか。そこで見てみると女子部に対して結構厳しい意見が多いんですよね。「女子部の意義が分からない」といった意見がたくさんありました。モニタコメントを見て，編集委員会として会誌に最適な記事を配置していくという点でも今回の終了は妥当ではないかと思っています。

加藤：なるほどね。では次に当初からのメンバで執筆回数もとても多い，高岡さん，いかがお考えでしょうか。

高岡：何回書いたか正直覚えてないんですよね（笑）。でも書くのは好きなので，楽しめました。



後列左から：菅谷氏，上松氏，高岡氏，五十嵐氏，辻田氏
前列左から：加藤氏，坊農氏



書いていて思ったのは、楽しんで読んでくれている人がいるのかどうかということですね。特に、女の人にはどう映っていたのだろうかというのが気になります。

加藤：モニタコメントってモニタの性別が分からないんですよね。だから、結局のところ議論があまり深まらない。女性が女子部をどう見ていたか、私たちの手元に届くモニタコメントからだけでは分からないんじゃないかって意見は編集委員会でもよく出ましたよね。

「女子」ということばへの抵抗

辻田：女子部を通して横のつながりができたなという印象があります。これまで自分の研究領域の女性研究者に会うことはありましたが、女子部の中には学会等でお目にかからないような方も多数いらっしゃるのです。その方々の考え方に触れることができたのは、とてもメリットがあったなと思います。あとは、「女子」というワードに反応する人が結構多いんだなと思いました。私たちのコラムに「女子部」とつけたことによって、反応されやすいところもあったかなと。

加藤：ちょっと抵抗があるとか、あえて「女子」を取り上げる必要はないんじゃないかってコメントがすごく多かったですよね。いろんな人を知ることができたというのは「女子部が行く」の企画趣旨のベースになっているところでもあったので、嬉しいですね。若手研究者が学会の理事会や各種委員会などに潜入して取材することってほとんどないじゃないですか。理事会は通常は理事以外が傍聴できないルールがあったり、取材が大変だったと思いますが、そういう重めの取材と執筆を通してお互いに苦勞を共有した部分はあるんじゃないでしょうか。五十嵐さんは、新世代委員会のメンバーでもあり、若手のそういった活動についてはどう思いますか？

五十嵐：編集委員ってただでさえ大変なわけですが、その上、女子部という括りの仕事もたくさんあって結構しんどいと思うこともありましたね。でも、こうして今日皆さんと座談会をしている事実自体が何にも代えがたいことで、私としては皆さんと繋がれて本当に良かったと思っています。「女子」というワードも当初から本当に悩みましたよね。「女子」は年齢層が若手に限られるんじゃないか、いや「女子トイレ」は女性全体を指しているとか、いろんな議論がありました（笑）。マイナスのモニタコメントも多かったですけど、気にかけてもらっていると前向きに捉えることもできますよね。楽天的すぎるかもしれませんが、スルーされるよりはいいというか。

加藤：そう、そうなんだよね。

五十嵐：塚本編集長も、引っかかってきているっていうのは、読んでくれている可能性が十分あるってことだとすごく励ましてくださいましたよね。

加藤：そう、続けよう、続けようってね。

女性の視点・女性の葛藤を記事に

五十嵐：ここでいったん解散にするのは残念ですけど、各編集委員の任期と同じ4年間続けることができたのは、意義があったかなと思います。元々、女性会員6%と聞いているのですが、私たちの記事がどれほど彼女らに響いているのかも分かりませんよね。女性会員はもちろんのこと、男性会員にも響く記事づくりを目指してきました。たとえば最近の辻田さんの家電のコラムなんかは男性会員にも面白く、女性ならではの視点が含まれていると思うんです。

加藤：学生会員の女性比率は増えているんですよ、10%くらい。だけど、全体にすると6%か7%にまで落ち込んでしまう。

上松：女性が少ないのは多くの学会にイえることですね。私は女子部の活動は会誌の在り方を改



めて問い直したんじゃないかと思っています。私たちの記事にはマイナスコメントも多く、会員のニーズに合ったものではなかったかもしれないけれど、読むことで新しい世界が広がったり、何らかのモチベーションが高まったりすることもあったんじゃないかと思います。モニタコメントってそういったコメントを拾い上げるシステムにはまだなっていないで、性別ごとにもソートされておらずまだ改善の余地があると思うんですよね。女性が楽しんでくれていることが分かったりするといいなと。女性が浮かばれないと結局学会が面白くなっていかないじゃないですか。

加藤：そうですね。

上松：私のまわりには、かつてシステムエンジニアでベーシック (basic) などをばりばりやっていたけれども、いったん出産・育児のために退職して、やっとそれらも終わったので、また新しい言語を勉強したいという女性がたくさんいるんですよ。そういう人たちにもアクセスできる女性の顔が見える会誌を作っていきたいですよね。

加藤：そうですね。でも女子部が今回いったん終わると、女性会員が毎号必ず何かを書くという枠組みが途絶えてしまう。会誌ってある程度の割合は女性が書いているというのがあるべき姿だと思うんですが、ほかの理系学会だと男性の顔写真がズラッと並んでいたり、硬い感じのところが多いですよね。なので女子部の活動は女性のビジビリティが上がるという意味でも続ける必要があったと思っています。

子連れ学会参加と支援の在り方

五十嵐：学会参加ではよく、「子供を連れてきちゃえばいいじゃん」って言われるようになりました。気軽に言うてくださるのはとてもありがたいと本当に思っています。でも一方で、連れていけない事情もあったりする。子連れ出張は学会当日に子供が病気になって飛行機に乗れないときには自分

の出張自体がキャンセルになるとか、リスクも高くなります。そういう状況で学会にいけなくなる時の罪悪感とかメリットデメリットをどのように伝えたらよいか常に対峙してきました。

加藤：そういう本音って実は話す機会がほとんどないですよ。で、女子部の意見を聞きながら全国大会に初めて託児所がついたことがありました。京都開催のときです。でも、実際には利用者がとても少ない。全国大会でも1名とか。

坊農：結局、連れてこられる子供のストレスもあるから、学会会場併設の託児所はなかなか使いにくいですよ。むしろ学会がベビーシッターや一時預かりなどの保育料を一部負担してくれる方が有りがたかったりします。学会は託児所をつけて子育て世代の研究者を支援してくれてはいますが、実際には子育ての現場である自宅のそばに預けて出張する方が子供のストレスも少ないというか。その辺で学会の考えと現場のニーズが相容れないのかなと思います。

加藤：情報処理学会はこれまでそういうサービスをほとんどしてこなかったから、これは理事会などできちんと議論していくべき話ですね。

坊農：「育児中の女性は学会に来られないのは当然」「学会で最先端の研究発表に触れられないのは仕方がないから耐えるべき」というのは変えていかなければいけないですね。最近はいろいろな研究会が研究発表映像をライブ配信したりして、自宅にいながら最先端の研究に触れられる機会が増えてきました。そういう活動をもっと前面に出して女性に開かれていることを示さないといけないと思います。

次はダイバーシティに着眼

菅谷：女子部はいったんここで解散ということになりましたが、今後は女性のみならず、多様性やダイバーシティにも目を向けていく必要があるのかなと思います。別のマイノリティの問題を抱える人を取り込んでいくというか。

加藤：そうですね。そして若い人もダイバーシティの1つ。彼らを受け入れていく枠組みを次の編集長の体制で築いていかないとけない。

高岡：実際私は学生のころに会誌のコラムを書きました。私自身、大学院生が会誌にコラム書いていいの、とずいぶん戸惑ったんですが、指導教員が、なんでもいいから書いてみなさいって(笑)。でもやっぱりそういう若いときの経験って大事だと思うんですよ。そして読む側の若い人も自分と同じ若手が書いていると親近感が湧くだろうし。

女性は量より質、真の自立した女性

加藤：実際に女性であるということを出して仕事したいと思っている人は少ないですよ。実は私もそう思っていないです(笑)。4年間やってみて、いま思うのはやっぱり面白かったってことです。

上松：学会に女性が少ないという話がありました、どんな女性でもいいわけではないと思うんです。自分の意見を言うことができたり、新しいことを創造し「企画し」たり、もちろん女子部みたいなコミュニティを作るといことも「学会活動の」1つだと思わうんですけど、積極的にいろいろなことを進めていける人材が「編集委員にも」必要だと思います。「このように活動したり、はっきりと自分の意見を言うことができる」真の自立した女性が増えていくと、研究の世界は自然とダイバーシティに傾いていくと思います。

五十嵐：育児だけではなくて男性の働き方だったり、介護をしている人だったり、女性男性にこだわらず、幅広い人たちが集まる場が必要だと思います。その1つとして、女子部はそれぞれの仕事に対する考え方にも触れられたし、さまざまな価値観を知ることができて有意義でした。

私たち、いったん解散します！

菅谷：私たち、まだ肝心なことをやっていないと思

うんですよ。肝心なこととは何かというと、女子部をやって女性会員が増えたとか、女性の地位が向上したり、働きやすくなったりすることです。すなわち、本髓をやっていないような気がして。今回の女子部はみんなで問題を共有というところまでできましたが、ぜひその先に向かいたいですね。

坊農：そうですね。会誌の別連載記事であるビブリオ・トークは書籍化されましたし、女子部もそういう活動を通してより多くの人に我々の考えを伝えていくべきかもしれません。やりましょう！

加藤：今日はみなさん、お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございました。なかなかこんなふう集まる機会はこれまでなかったのですが、女子部執筆陣の皆さんの思いを直接聞くことができるとても良かったと思います。女子部はいったんこれで終了しますが、女子部の次の展開は次期編集長の稲見先生と引き続き議論していきたいと思ひます。今後ともなにとぞよろしくお願ひします。

一同：ありがとうございました！



座談会後のランチタイム

加藤由花 (正会員) yuka@lab.twcu.ac.jp

1989年東京大学理学部卒業。同年日本電信電話(株)入社。2002年電気通信大学大学院情報システム学専攻科博士後期課程修了。博士(工学)。電気通信大学助手、産業技術大学院大学教授を経て、2014年より東京女子大学数理科学科教授。情報ネットワーク、ネットワークを利用したロボットサービスに関する研究に従事。2013～2016年度本会理事(会誌・出版担当)。

坊農真弓 (正会員) bono@nii.ac.jp

2005年神戸大学大学院総合人間科学研究科にて博士号(学術)取得。その後、ATRメディア情報科学研究所研究員、京都大学大学院情報科学研究科研究員、日本学術振興会特別研究員(PD)、UCLAやテキサス大学オースティン校にて客員研究員、国立情報学研究所ならびに総合研究大学院大学助教を経て、2014年から同准教授。人と人のインタラクションや手話相互行為分析の研究に従事。プライベートではもっぱら育児に奮闘中。2017年より本会理事(会誌・出版担当)。